青年期から成人期における自己愛と選択の回避との関連の変化

原田　新
（浜松医科大学医学部児童青年期精神医学講座）

【問題と目的】

青年期に高まった自己愛を低下させることは青年期の発達的課題であり（谷，1997），成人期に至っても自己愛が高水準で保たれている場合には，人格発達に負の影響を及ぼすと考えられる。原田（2012，印刷中）は，青年期と成人期における自己愛と自我同一性，自己愛と親密性との関連の差異について検討した。その結果，自我同一性や親密性との関連において，自己愛の一部の下位尺度は成人期でより強い負の関連を持つという発達段階間での関連性の差異が見出された。

自己愛との関連が指摘され，かつ青年期から成人期にかけての人格発達に関わる変数としてアパシー心性が挙げられる。多くの研究者がアパシー生起の背景要因として，自我同一性の問題に言及しているが（馬場，1976；鑪，1990），より具体的な問題として，同一性危機における「選択の回避」が，アパシー状態の根底に存在することが示唆されている（谷，2008；鉄島，2004）。青年が心理社会的な選択肢に直面した際，何らかの選択や決断をすることは，他の選択肢の選択可能性の放棄も意味する為，自身の無限の可能性や万能感を保持しておこうという心理を背景として「選択の回避」は生じる（谷，2004）。この心理的背景には，自身の万能感を破綻させられることへの恐れ，すなわち自己愛的傷つきへの恐れが関わっているのではないかと推測される。本研究では，多側面ある自己愛の中でどの側面が「選択の回避」と関連するのかや，青年期と成人期における関連性の差異について検討する。

【方法】

（1）調査対象者：①青年（18 歳～25 歳の大学生・大学院生）260 名（男性 70 名，女性 190 名，平均年齢 19.43 歳，*SD*＝1.32），成人（26 歳～35 歳）363 名（男性 150 名，女性 213 名，平均年齢 29.74 歳，*SD*＝2.57）

（2）測定尺度：①NPS 短縮版（谷，2006）:「有能感・優越感」，「注目・賞賛欲求」，「自己主張性・自己中心性」，「自己愛性抑うつ」，「自己愛的憤怒」各 5 項目。7 件法。②自己愛人格尺度（原田，2009）の「自己関心・共感の欠如」12 項目。7 件法。③選択回避尺度（谷，2008）：全 5 項目。7 件法。

【結果と考察】

青年期と成人期のデータのそれぞれに対し，自己愛関連尺度と「選択の回避」との関連について検討した（Table1）。さらに，その下位尺度ごとの青年期と成人期の関連に対して相関係数の差の検定を行った。まず「選択の回避」との関連において，青年期では「自己愛性抑うつ」，成人期では「自己愛性抑うつ」と「自己愛的憤怒」という，いずれも自己愛の過敏性を表す下位尺度に.20 以上の正の関連が見られた。また相関係数の差の検定からは，「自己愛性抑うつ」と「自己愛的憤怒」の 2 下位尺度のみ，青年期と成人期の関連パターンに有意差が示された。以上から，まず多側面の自己愛の中でも，自己愛的傷つきやすさに相当する過敏性（谷，2004）こそが，「選択の回避」に関わることが示唆された。また，それら過敏性の 2 下位尺度は，成人期になるにつれて，より「選択の回避」と強い正の関わりを持つようになることが示唆された。青年期には，心理社会的アイデンティティを模索する為に，モラトリアムと呼ばれる一定の猶予期間が社会から与えられている（Erikson，1959）。その猶予期間では，アイデンティティ形成に向けた選択や決断のやり直しがある程度許される為，青年期には選択を行う場面で自己愛的傷つきやすさが生じにくいのではないかと考えられる。一方，成人期には社会から選択のやり直しを行う猶予が与えられず，選択の失敗が社会的な否定的評価の被りを予測させやすい為，自己愛的傷つきやすさの高さが「選択の回避」とより強く関連するのではないかと考えられる。

Table 1　青年期と成人期における自己愛関連尺度と選択の回避との相関と，相関差の検定

	選択の回避		①と②の相関差
	①青年期（*N*=260）	②成人期（*N*=363）	（χ^2値）
＜自己愛関連尺度＞			
有能感・優越感	-.04	-.19 ***	3.38
自己主張性・自己中心性	-.08	-.22 ***	3.20
注目・賞賛欲求	.05	.12 *	0.70
自己愛性抑うつ	.23 ***	.44 ***	8.40 **
自己愛的憤怒	.16 *	.35 ***	6.00 *
自己関心・共感の欠如	.07	.07	0.01

*p<.05，**p<.01，***p<.001